

ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

上 田 千 秋

一 はじめに

—— オウエンの性格・思想形成をめぐる

従来の研究の問題点について ——

エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895) がみたロバート・オウエン (Robert Owen, 1771~1858) は、「崇高なまでに子どもらしい単純な性格の人で、同時にまれに見る天成の人間指導者であった」⁽¹⁾。しかもそのエンゲルスによって、「イギリスで労働者の利益のためにおこなわれた社会運動や、ほんとうの進歩はすべてオウエンの名まえと結びついている」⁽²⁾と評価されているほどの偉大な存在の人格像を簡単に描くことは至難のわざである。

とりわけ私のように彼の社会福祉観に焦点をあてようとしている者にとつては、前者の轍をふむ自由すら与えられていないのである。

もちろんいままでのオウエン研究者が積み上げた収獲は決して量的

ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

に少ないわけではないし、最近はいわゆるユートピア志向のたかまりに比例するかにように、新事実をふまえたオウエン研究文献が数多く産み出されている。だが、最近の作品の場合も、広く社会思想家、或いは社会改良家としての彼をとらえたものか、又はその『性格形成論』に焦点をおく独創的教育家としての彼を浮き彫りさせたものか、或いは、彼の未完の『自叙伝』とその後の伝記類の欠漏を埋めるものに限られていると言つて良いであろう。

さて、オウエンの八七年の長い生涯にわたる多彩な活動を、単純に年を追つてその業績を追いかけると、彼という人間が解らなくなってしまう。たとえばコール (George Douglas Howard Cole, 1889~1959) はこうも書いている。

「商店員および製造業者、工場改革者および教育家、社会主義および協同組合の先駆者、労働組合指導者および非宗教道徳論者、理想社会の建設者および実際の事業家ロバート・オウエンは、彼の世代にとつてある程度の謎であつたし、後代の者にとつてもそれに

とらず謎である」⁽³⁾と。

事実、後代の者にとってこの謎は拡大される。周知のようにエンゲルスは彼の社会主義をユートピア的だと非難した。にもかかわらず彼は、オウエンをイギリスの社会運動と、この国の進歩に直結する先覚と認めたのはなぜだったのか。われわれのこの謎解きは未だ終わっていない。

この謎をめぐってハリソン (J. F. C. Harrison) はこう述べる。

「ロバート・オウエンのパラドックスは依然として魅力である。オウエン主義施設は失敗し、彼の社会主義観は彼が死ぬ前にすでに流行おくれであつた。しかるに彼が依然としてイギリス型社会主義における中心的存在の一人であるのはなぜか？ エンゲルスはオウエンの社会主義をユートピアだと言ひ難し得たのに、しかもイギリスの一切の社会運動、一切のほんとうの進歩は、オウエンの名と結びつくと思つたのはなぜなのか？ どんな事情で、イギリス社会主義の父が労働者階級の地位向上を求める労働者ではなく、紳士的な博愛主義者となつた独力独行の製造業者だったのか？ 彼の同時代人をあれほどひきつけたオウエンの謎に魅力は引き続き何世代もの改革者たちの心を魅了した。……彼の業績と思想はおどろくほど、現代的である。彼は現代への教訓ないしは使命をもっている。イギリス型社会主義の多くの部分は、事実、過去の謎的人物の再評価であり、いつの時代にもミスター・オウエンについての新見解がある。」⁽⁴⁾

ミスター・オウエンの魅力について、わが国の最も傑出したオウエ

ン研究者である五島茂氏はこう述べる。

「オウエンはパラドックスの人間のゆえにわれわれをひきつける。オウエンの思想の核は協同主義、それもきわめて含蓄に富んだものだ。ひろく多響的^{ポリフォニック}の私はおもう。協同組合、労働組合、労働交換所、工場厚生福利施設、工場立法、世界最初の幼稚園、労働者新教育、性格形成論、環境社会学、新結婚観、既成宗教の否定、都市と農村の結合、協同社会、夏時間^{サマータイム}、グリーン・ベルト等々、今なお世界的関心をひき、多くはわれわれの生活に入りこんでしまつて疑問にもおもわなないこれらのアイデアは、みなオウエンという泉に回帰する。これをたった一人の人間が考え出し、行なつたのだ。パラドックスも謎も生まれよう。八七歳の最後の最後まで精神的に理想と民衆のためにたたらいた驚くべき大人物——これがロバート・オウエンだ。」⁽⁵⁾

五島氏のオウエン研究は半世紀をこえるという。執念深く人間オウエンを凝視してこられた氏にしてこの言である。⁽⁶⁾ましてオウエンに惹かれて未だ十年余にしかならぬ私には、この巨才をめぐる謎の解明が容易であるなどとは毛頭考えない。だが現代になおその思想が生きているオウエンの人間像は、なんといつても彼の性格ならびに思想自体のより緻密な分析によつて把握さればならぬことはいうまでもない。もちろん、いままでオウエンの性格、思想の分析に関する着実な研究が行なわれなかつたわけではない。だが、わが国のこれまでの研究は、総じて、個々の執筆目的に依じて、たとえば教育家としてのオウ

エン像、或いは社会思想家としてのオウエン像を、時代に合致した形

により鮮明にするために、執筆者の主観的色彩により、彼の性格、思想の一面をより濃厚に着色して、その結果、彼の基本的な性格、思想をよりパロディカルなものにしてしまったといえる。つまり従来のオウエン理解は、結果として、オウエン思想の基本を把握することから離れていたとさえいえる。⁽⁷⁾

もちろん私のこの作品は、オウエンの全生涯にわたる業績を網羅し、その思想的根拠をたづねるものではない。オウエンの社会福祉(的)実践の経過と、実践を支えた社会福祉(的)思想の所在をたづねることに究局的研究目的をかけている私の旅路にうちたてる一本の道標でしかない。だが、すくなくとも社会福祉という社会的実践が、所定の社会秩序の下にある社会的存在の全生活行動を対象領域とするものである限り、オウエンという社会的実践家を実在させた彼の性格ならびに思想形成をめぐる基本的理解をあらかじめ必要とする限り、この道標の存在意義を否定することはできないであろう。

そこで、まずこの偉大な人格についての包括的な理解を求めるにあたっては、私も先例にならって、ベヤア(Max Beer, 1864~?)の『イギリス社会主義史』(A History of British Socialism)が描くオウエン像に前提を求めることにした。以下は彼のまとめたオウエンの人格像である。

「一九世紀前半におけるイギリス社会主義の中心人物であるロバート・オウエンは、独自の哲学的思索や、秀れた論著によって有名になったのではなく、性格の強さとたゆまない改革運動とによって有名になったのである。彼は、産業革命や社会的激動や、労働階級の

ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

経済的政治的権力獲得闘争などの、発端からその後の発展を目撃したし、それに参画しましたのである。この時期の社会運動に及ぼした彼の影響は、注目すべきであり、現在もなおその余影を認めることができる。彼の強固、単純な知性と、完全な肉体的健康と、性質までが、つねに理性の統御下にあつて、侵されることのない力強い、ひたすら目的に向つて邁進する決意となり、彼をして人間指導者たらしめた自信と決断になったのである。その大部分は遺伝と天賦の結果であるといえるこれらの特性について、オウエン自身は、人間の性格は自分の生れた環境や、いま生活している環境によって形成されるという若い時に得た確信のせいになっている。オウエンの幾つかの指導原理の一つであるこの確信を得るや否や、彼の「心は諸々の観念を融合して純一となり」したがって、「次第に沈着冷静となり、憤怒や悪意も、彼からは「消え去ってしまった」。しかしながら彼のこの意見に同調した仲間の合理主義者が非常に多かったのに、オウエンを有名にしたこの推理力の単純性や、心ののどけさや、指導者としての才幹や、社会改革活動の能力を受け継がなかったのは何故かについて、彼は説明することができなかったのである。

以上はオウエンの性格の一面である。」

ベヤアは更に彼のより重要な一面の省察を忘れていない。引き続き述べる。

「オウエンの冷静な論理の鎧の下には、労働貧民に対する同情の念に燃える心と社会的幻想によって培われた想像力とがあつた。彼はその一身に、実業家の俊敏慧眼と、予言者の感激と忘我とを兼ね備

えていたものである。彼がはじめマンチェスター及びニュー・ラナークの織物労働者の指導と事業経営に没頭していた間は、彼の感情と想像力とは強大かつ冷静な理性によつて統御されていた。その頃の彼は成功につぐ成功であつた。スタムフォードの一呉服店の小僧は二十歳の時にはマンチェスター最大の工場の一支配人となり、ついでその所有者となり、ついにはスコットランドにおける最大の製造工場の共同経営者、多数の従業員の合理主義教育者となつた。富と名声は思いのままになつた。彼の方から意識的な努力をせずとも、部下は彼に心服した。またオウエンよりも身分の高い人達は彼の理解力と真価とに對して尊敬をはらつた。諸国の王侯、貴族は彼の教育事業、博愛事業を讚美した。そしてニュー・ラナークは、一時——特に一八一五年から二〇年に至る間は、——改革主義者のメヅカ(Mecca)となつた。……しかし乍ら、彼が貿易、商業及び博愛事業の領域から離れ、そして人類の救済者たるの使命に一身を捧げるようになるや否や、彼の俊敏なりアリズムも、論述の正確さも、驚くべき経営手腕も失われてしまつた。一七七一年より一八五八年に至る彼の長い生涯のうち、一八一七年以後は彼の第二期の生涯の特質がまざまざと現われてきた。それは失敗と物質的欠乏と失意に満ちたものであつた。彼の社会観はいまいになり、社会批評は誇張に過ぎ、推論は予言に墮し、彼の魅力的な温和な純朴さは多分に小児の輕信さにすぎなくなつてしまつた。

しかしながら、彼の無限の慈愛心と人類愛とは、幾多の欠陥を償つて余りがある。また新しい発明の意義についての彼の洞察力、幼

児教育、工場立法及び労働階級の協同活動に示された彼の貢献は、社会主義の歴史における最重要な地位の一つを彼に確保させたのである。⁽⁸⁾

さて波多野鼎氏には『人道主義者、ロバート・オウエン』と題する敗戦直後期の作品があるが、氏は、その作品の冒頭に、ベュヤアの以上の記述をほぼ全面的に引用され、「オウエンの人物については右のベュヤアの記述がこれを語り尽くしている。これ以上の説明を加えるのは蛇足である。」⁽⁹⁾と述べておられる。

波多野氏は、オウエン研究者としても著名であるが、氏は昭和初期の一論文において、オウエンは、サン・シモン(Claude-Henri de Rouvroy Comte de Sainte-Simon, 1760~1825) フーリエ(François Marie-Charles Fourier, 1772~1837)と共に、近代三代ユートピアンの一人に数えられているが、後二者はユートピアンのユートピアたる所以である『孤独の思索家』という本質を備え、「実践的には高踏的態度を持する、伯夷叔齊の人物であつた」⁽¹⁰⁾が、オウエンは『孤独の思索家』ではなく、「実践的思想家たらざるをえない条件の下におかれていた人であつた」⁽¹⁰⁾として以下の二つの条件をあげておられる。

「第一に、彼は、強力にして單純な智能を有つていた。完全な肉体的健康と情熱とを有つていた。それ等は常に、直進的な決意と自己信頼の果斷となつて現はれることができた。彼はその一身において、実業家の俊敏慧眼と、予言者の感激と忘我とを兼ね備へていたものである。

第二に、彼は産業革命の勃興及び発展の渦中の中にいて、彼自身が

その有力な一つの横杆となったばかりでなく、同時に発展しつつあった労働者階級の運動を見たのである。労働者に対する同情に燃ゆる心臓は重役椅子に安息するのを許さなかった。⁽¹⁰⁾

氏によれば、この二つの条件が主観的契機と客観的契機となって『実践的思想家』としてのオウエンが生れたのであるが、第一の条件にあげた如く、「予言者の感激」「直情径行」「自己信頼的果斷」といった特性は傑出していたが、「理論的武裝」は堅固でなかったとして、オウエンの「一生を顧みるとき、情熱のまま漂ひ行く人々の一面を看過するわけに行かぬ」と説明しておられる。⁽¹⁰⁾

この場合も我々はやはり氏におけるベエヤアの『イギリス社会主義史』の影響を見ることができるのである。波多野氏のこの説明では、オウエンの性格をめぐるパラドックスはやはり解かれていない。

また、宮瀬睦夫氏は、その著『ロバート・オウエン、人と思』において、「オウエンの性格」について一章を設け、その特色を、①強い性格、②強い正義感、③内気の内向型、④思索型の人、⑤自学自成、⑥宗教的性向、⑦深い慈愛、の七節に分けて説明しておられる。しかし宮瀬氏は以上のオウエンの性格的特色を、オウエン自身の『自叙伝』の記述によって説明されただけであり、オウエンというパラドキシカルな人格がどう形成されたかについては説明されてはいないし、性格的特色の相互連関の説明もなく、「オウエンの宗教的性向はすでに八・九歳の頃から見えはじめる」と述べられるなど、若干周到を欠いた表現がある。

ここで、さきに長文にわたって引用しておいたベエヤアにかえってロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

考えてみよう。まずベエヤアはマルキストであるが、人間指導者として秀れたオウエンの資質の「大部分は遺伝と天賦の結果である」と断定している。にもかかわらず、いままでのオウエン研究では彼の家系に関する限り、極めて無頓着な態度がとられてきた。その原因としてオウエンの『環境説』をあげるのならば、むしろ人格形成における環境の影響を重視し続けた彼の性格形成における先天的影響を考えた上で、彼に及ぼした環境の影響を考えるのが筋道ではあるまいか。『自叙伝』において、オウエンが家系のことについて殆んど語らなかったこと、むしろ彼は家系について意識的に語ることを避けたふしがみられるのであるが、その理由を彼の『環境説』に帰してううのでは、彼に関する謎の部分はいつまでも温存されることになる。

またベエヤアも指摘する如く、実業と社会改革の第一線から退いたオウエンの後半生は、「人類の救済者」としての使命感に燃えて、予言者の性格をより濃厚に前面に押し出すようになるのであるが、どうしてオウエンが若くして「実業家の俊敏慧眼と予言者の感激と忘我とを兼ね備えていた」のかについての従来の検討は充分でない。

いままでのオウエン研究においては、彼の思想形成に影響を与えた人物として、ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712~1809)・ベンサム(Jeremy Bentham, 1748~1832)・ウィリアム・ゴドウィン(William Godwin, 1766~1836)・リカード(David Ricardo, 1772~1823)・ミル(James Mill, 1773~1836)などをあげることが多いし、わが国においてもこれらの個々の社会思想家とオウエンとの密接な関連を強調した研究業績も次第に多くなっている。⁽¹²⁾ また『自叙伝』が更に挙げられている著名な人物とし

プレハス (T.R. Malthus, 1766~1834)・プレイス (Francis Place, 1771~1854) の影響や、息子のロバート・デイル・オウエン (Robert Dale Owen, 1801~1877) の『回顧録』 (Threading My Way, 1874) が証言するようにペイン (Thomas Paine, 1737~1809) やカーフーン (Patrick Colquhoun, 1745~1820) の影響を考えるとふさわしい。

しかし乍ら、もともと理論家として体系的に学問的収獲を積み重ねていくことを一次目的としたのではなかったオウエンに、以上あげたような啓蒙思想家ないし社会改良主義者の思想の秩序ある吸収を期待すること自体に無理があり、しかもこれらの先哲の思想的影響は総じてオウエンの社会的活動が活潑化されるにつれて、その言動の中で明らかにされていくのである。したがって特定の思想家とオウエンとの関連をとりたてて強調することが主人公であるオウエンの性格と思想を説明したことにはならないし、オウエンの独自性を浮き彫りしたことにもしならない。

そこでわれわれが問ひ続けなければならないのは、オウエンにおける「崇高なまでに子どもらしい単純な性格」(エンゲルス)が、幼少期においてどう形成されていったかであり、この稀有の性格が、当時に於けるフランス唯物論とイギリス啓蒙思想の無制限な受容を可能ならしめたことについての理解である。万人が認めている彼の宗教的性格が、どう形成されたのか、またそれに先立つ、彼における「遺伝と天賦」の因子はどう把握すべきかの研究が進められなければ『性格形成論』の父祖的存在としてのオウエンの性格と思想をめぐる謎はいつまでも解き明かされることはないであろう。

したがって、私は、以下の各節において、オウエンの家系について若干の推察を試み、次いで、幼少期における彼の宗教的性格の形成に關して、基本的な考察を加えてみようと思うのである。

- (1) F. Engels; Herrn Eugen Dührings Unwältigung der Wissenschaft, Marx-Engels Werke, Bd 20, Berlin 1962.
エンゲルス、村田陽一訳『反デューリング論』国民文庫版(2)、四七四ページ。
- (2) 同、村田訳、四七七ページ。
- (3) G.D.H. Cole, Introduction to the Everyman's Library Edition of Owen's "A New View of Society" 1927, p. vii.
- (4) J.F.C. Harrison; A New View of Mr. Owen, in S. Pollard and J. Salt (ed.), Robert Owen, Prophet of the Poor, 1971, p. 1.
- (5) 五島茂『ロバート・オウエン』一九七三年、一一二二ページ。
- (6) 五島茂氏は、坂本慶一氏との対談の中で、次のように述べておられる「私には深入りする執念がありましてね。ある人間を調べるとき、その生れ育った風土、あるいはその空気を吸わなきゃだめだと思ひましてね。オウエンが生れたニュータウンにはひと夏住みました。もうオウエン研究五十数年ですが、最後の引倒しにならぬよう注意はしていますが、でもまだ知らないことが山ほどあつて、慨嘆することしばしばです。」『オウエン・サン・シモン・フリーエ』(世界の名著・続・付録8)一九七五年、二頁。
- (7) この部分の表現については、永井義雄『イギリス急進主義の研究』二〇四〜二〇五頁の説明に負うところが大きい。
- (8) Max Beer; A History of British Socialism, London, 1923, pp. 160~162. 邦訳には、戦前のものとして、加田哲三訳『英国社会主義史』(春秋社版・世界大思想全集、一九二九年)があり、戦後には大島清訳『イギリス社会主義史』(岩波文庫)があるが訳文はこれらによつていない。

(9) 波多野鼎『人道主義者・ロバート・オウエン』一九四六年、四ページ
(10) 波多野鼎「社会思想家としてのオーエン」『社会事業』(第十二巻第八号・ロバート・オウエン七十年記念特輯) 一九二八年十一月、二八～二九ページ。

(11) 宮瀬睦夫『ロバート・オウエン、人と思想』一九六二年、一五六頁。

(12) たとえばルソーとの関連を強調したものとして、芝野庄太郎『ロバート・オウエンの教育思想』一九六一年、宮瀬睦夫『ロバート・オウエン、人と思想』一九六二年など、ベンサムとの関連について、『山田孝雄』ベンサム功利説の研究』一九六〇年、など、ゴドウィンとの関連について白井厚「ウィリアム・ゴドウィンとロバート・オウエン」『ロバート・オウエン論集』一九七一年、白井厚「ウィリアム・ゴドウィン研究」(増補版) 一九七二年、などがあり、リカッドオとの関連について、堀経夫「オウエンの計画に対するリカッドウの批判」ロバート・オウエン論集』一九七一年がある。

日本におけるオウエン研究については、五島茂「オウエンの著作と文献」『社会事業』(第十二巻第八号) 一九二八年、をはじめとする五島氏のまとめられたもの及び、古賀秀男氏(たとえば「ロバート・オウエン研究の新しい展開」『歴史学研究』二八二号、一九六三年)や白井厚氏(たとえば「ロバート・オウエン関係文献と研究の動向」『三田学会雑誌』第五七巻第九号、一九六四年、「ロバート・オウエンと現代—生涯二〇〇年を中心に—」『季刊社会思想』第二巻第二号、一九七二年)などを参照のこと。

二 オウエンの家系について

ロバート・オウエンの『自叙伝』(正しくは『自叙伝・第一部』The Life of Robert Owen, Written by himself With selections from his Writings and correspondence, Volume I, 1857)の本文は、次の文

ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

章で始まる。

「家伝の大型聖書グレート・バイブルの書込みによると、私は一七七一年五月十四日、北ウエイルズ、モントゴメリシャーのニュータウンで生れ、翌六月十二日に洗礼をうけた。

父もロバート・オウエン。ウエルシュプール生れで、長じて馬具商となり、また金物商も兼ねていたらしい、このウエイルズ国境の小さい町でその頃よくこれら二つが兼業にされていたように。父はウィリアム家と縁組をした。同家は私の子供のころには、ニュータウン近在きつての豪農にかざえられていた大家であった。

母は(人の話では、お嫁入りの時、母は相当評判の美人であったようだ)同家の長女で、その階級では、こころも物ごしもすぐれていたと思う。

父母は結婚するとともに新居をニュータウン——父の馬具商・金物商を業としていた——に定めたらしい。父は終生郵便長post-masterであった。彼は教区の仕事も万端管理していた。教区の会計や

仕事を町のどの連中よりもよくしっていると思われていたからだ。⁽¹⁾

この父母の間に七人の子供が生れたが、そのうち二人は早死したので、残ったのは、ウィリアムとアンとジョン、ロバート、そしてリチャードの五人であった。つまりオウエンは残った五人の下から二番目のむすこであった。

オウエンの生い立ちを物語る記録は、彼の晩年の作品である『自叙伝』以前にはなく、⁽²⁾その後の内外の彼に関するおびただしい伝記類にも『自叙伝』以外の新事実殆んど紹介されていない。しかも『自叙伝』において、彼は、先祖のこと、家族のことについて余りふれてい

ない。「父の両親については、二人とも私の生れる前に亡くなっていたので、別に詳しく父に尋ねようと思ひもしなかった⁽³⁾」として、先祖のことについては一切ふれていない。また父の生地ウェルシュプール Welshpool はニュータウンの東北十三マイル半の地点にあるが、その間の道路事情が悪かったことをあげているのみで、幼少の頃に訪れた形跡がなく、ただロンドンに向けて旅立つ十歳の時に、父と共に通過したことを記録しているに過ぎない。また兄弟のことについては、二十代になってからロンドンへ出かけ馬具商の未亡人と結婚した長兄ウィリアム William について自分自身の行動と関連する場面でのみ簡単にふれているが、二歳上の次兄ジョン John については、自分の字と兄の字のどちらがうまいかという賭があり、それ以後兄弟の仲が気まづくなったことをあげているのみである。また姉のアン Anne 及び弟のリチャード Richard のことについては全くふれていない。『自叙伝』における幼年時代の記録が簡潔に過ぎるのは、彼が十歳で故郷を離れてから、生涯を閉じるために帰って来る八七歳までの間に、ニュータウンを訪れたのは僅か二回であることや、人格の形成の上で、いわゆる『環境説』(Environment Theory, Milieutheorie)を支持した彼の思想的立場から考えれば不思議なこととはいえないと一般に受けとめられている。

もっとも彼は、家系のことについて、幼年時代からの親友であったダン博士 (Dr. James Donne of Oswestry) から、オウエン家が北ウエイルズをかって支配した貴族の直系に当ると知らされたことを『自叙伝』で述べている。

「私が一八一七年、シテイ・オブ・ロンドン・タヴァーン City of London Tavern で何度か催した公開大集会によって、この文化社会の『考える精神』をよびさましていた頃、この大切な友人ダン博士から一通の手紙を受けて私はびっくりした。それは、彼が私の系図を調べるといふおもしろい仕事をしておつて、私が北ウエイルズ侯家の正系にあたる (I was a regular descendant from the Princes of North Wales) ことを発見したと知らせてきたものだった。善い人だった、疑いもなく彼はそれが私を喜ばす情報だと思ひ、だからこそ彼は骨身を惜しまなかったのだ。しかしその当時、公けの大問題や、手広くやっている私の商用が心を占めていたので、かかる内輪のことなどはなおざりにして、それについて全く何の調べもしなかった。こうした事情で、そういう親切に対して何かと充分謝さなかったのが、私には今も気になる。⁽⁴⁾」

オウエンの家系のことに関して、彼と密接な関係にあったといわれるジョーンズ (J. Jones) も全くふれていないし、⁽⁵⁾ 現在もなを最も忠実なオウエン伝記の作者といわれているポドモア (Frank Podmore) は、『自叙伝』の記述をそのまま引用し、「ダン博士の若干の手紙は、マンチェスター・コレクションに存在する。彼はオウエンが姉のウィバー夫人に送金するのを手伝つてやつていた⁽⁶⁾」と脚註を付しているだけである。またコールの『オウエン伝』は、十歳年長であったダンが、幼ないオウエンを良く散歩に連れ出したこと、生涯の友人として彼がオウエンに与えた影響——とりわけ自然賛美への強いあこがれ——が大きいことを指摘しているが、系図の問題には一切ふれていない。

この点で興味をひくのはコール夫人 (Margaret Cole) の『オウエン伝』である。夫人は、オウエンが北ウェイルズの貴族の直系であるとする説は、彼の父母の出身地 Welshpool がかつての Powysland の中心都市でもあり考えられることだと述べている。⁽⁷⁾

その家系のことにについて、オウエンの長子、ロバート・デイル・オウエン (Robert Dale Owen, 1801~1877) の『回顧録』では「ダン博士が自分自身の家系について調べているうちに、父の家系が北ウェイルズの土着の貴族の直系に当ることを発見したので、希望するならより詳細な情報を提供しても良いという申し出があった。」⁽⁸⁾として、ダン氏からの手紙の一部を掲載しているが、それによると、「グレイ (Thomas Gray, 1716~1771) の頌詩の次の部分に出て来る英雄がオウエンの先祖だということである。

「オウエンの迅速、オウエンの剛毅

ロデリック家の汚れなき花

ギウイネスの盾、ブリテンの珠玉

王の王たる君の

公正な行いと寛大な心よ

私の詩は、オウエンを賛えよと命ずる」⁽⁷⁾

この英雄オウエンは、「幅広の刃こぼれのした剣」を振りかざして一一五七年、アイスランドからの侵入軍 (デンマークとノールウェイ軍の混成) を撃破した英雄であり、ギウイネス (Gwyneth) は北ウェイルズの古名であり、この英雄がこの地に君臨したロデリック (Roderick) の子孫なのだとするのである。ロデリック (スペイン名ロドリゴ Roderigo)

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

ligo) が、スペインにあった西ゴート王国の最後の王の流れをくむものかどうかは明らかではないが、ケルト種族の分派であるウェイルズ種族 (Welsh race, Cymry キムリー又はシュムリー) の先祖がスペインからやって来たとする説は一般的であるし、デイル・オウエンの書き遺したこの資料は今後更に検討する価値を含むものといえる。なぜなら、今井登志喜氏の『英国社会史』にも、その後の英雄オウエンが登場してくるからである。

「ウェイルズに就いていえば、此の地方にはエドワード (一世) の征服以来多くの要塞が造られ、イギリスはそれらを拠点としてこの地方を軍事的に支配していた。そしてこの支配は、直接には多く辺境領主というイングランド人の領主によって行われていた。ウェイルズの人民はこれに対して不満を持っていた。一四〇〇年にこの地方のほとんどの貴族の血を引いたオーウェン・グランドゥアなるものが、イングランド人の領主の統治に反抗して叛乱を起し、ウェイルズの大部分を従えて、自らウェイルズ公と称した。ウェイルズ人は、かねがねイングランドに対して不平を持っていたので、このような優れた指導者の出現をみて惣ちこれに応じた。彼等はウェイルズから打って出て、しばしば四方を攻略し、城を攻め取り、またイングランドから送られた討伐軍を再三破った。それでウェイルズは一時は全く独立の状態となった。しかしこれも最後にはヘンリー四世が全力を挙げて討伐を行うに及んで、ウェイルズより脱れたイングランドの富力の前に辛うじて鎮圧されるに至った。」⁽⁹⁾

このオウエン・グランドゥア (Owen Glendower, 1354?~1416) だ⁽¹⁰⁾

るものがロバート・オウエンの先祖に当るのかどうか確証はない。ただ重要なことは、オウエンという名前が北ウエイルズでは伝統的に有名であったという点である。

ところで本節の冒頭にあげておいたように、『自叙伝』本文は、「家伝の大型聖書 great Bibleの書き込みによると…」という書き出しで始まっている。ここで気になるのは、オウエンの生家に「大型聖書」が伝わっていたということである。両親がともに英国国教会 the Church of England に属していたことについては、オウエン自身が『自叙伝』冒頭の解説で明らかにしているが、⁽¹¹⁾「教区の会計や仕事を町の連中よりもよく知っていると恐れ」教区の仕事の管理を任されていたにもせよ、馬具商兼金物商の親元に家伝の「大型聖書」があったということは一応尋常ではない。

この「大型聖書」が、聖書・マシュー訳 (Matthew's Version) の改訂版であり、ヘンリー八世の命を受けて、カヴァーデール (Miles Coverdale) 達が一五三九年に完成させたいわゆる『大聖書』を指すのか、或いはウエイルズ出身で後に St. Asaph の主教になったモーガン (William Morgan) の一五八八年の聖書訳を指すのかは不明であるが、その何れであるにせよ「大型聖書」は本来は教会に備えつけられるものであり、当時一般家庭で読まれたのは、小型の『ジュネーブ聖書』 (Geneva Bible) であるといわれている。⁽¹²⁾ 周知のように『自叙伝』その他を通じて、オウエンは自身の家系について殆んど語らなかつたし、長子のデイル・オウエンも述べる如く、家系については意識的に口を閉ざしていたと思えるふしがある。したがってこれも臆測の域を出ないのであ

るが、もしも聖職者ジョン・オウエン (John Owen, 1615~1683) が、彼の家系につながる存在であったとするならば、「大型聖書」が家庭に伝わった理由も納得できるし、加えて次節で見るとおりの彼の異常な宗教的性格についての説明もより容易になるといえる。

ジョン・オウエンは、当初国教会の教師であったが、後に長老派に転じ、独立派となり、クロムウエル (Oliver Cromwell, 1599~1658) の宮廷牧師に任ぜられ、更にオックスフォードのクライスト教会の司祭長となり、一六五八年クロムウエルが死亡するまで、オックスフォード大学副総長の地位にあった。更に「王政復古」 (the Restoration) 後はロンドン独立教会の牧師として非国教徒に対する迫害とたたかい続けた存在であり、彼の著作集 (一八二六年版は二八巻、一八五〇―五五年版は二四巻) はいまなお広く英米の宗教界で読まれているという。彼自身はオックスフォードシャーの生れであるが、同名の父 (John Owen, 1560~1622) はウエイルズのラナルモン⁽¹³⁾ (Llanarmon) 出身であり、ラテン語を駆使する諷刺詩人であった。このジョン・オウエン父子とロバート・オウエンがどうつながるかを究明することは今後必要であろう。

すくなくとも現時点においては、オウエンの家系に関する研究は、オウエンを頂点としてその子孫に及ぶものは別として、彼の先祖に遡るものは未だ存在しない。したがって、わが国のオウエン研究者による、彼の「生れ」についての判断も極めて曖昧になっている。

たとえば、北野大吉氏は、オウエンの父は「町に於ける相当有力者の一人であった」⁽¹⁴⁾とし、上田貞次郎氏は、「全く無産者ではないが、

さればといつて決して裕福ではなかった」⁽¹⁵⁾とされる。また、大林宗嗣氏は、彼は「従来の社会事業家や学者達の如き上流階級の生れではない」⁽¹⁶⁾とし、森戸辰男氏は「中産の家庭に生れた」⁽¹⁷⁾としておられる。

また戦後の研究をみても、住谷悦治氏は、オウエンの父を「町での相当の有力者」とされ、宮瀬睦夫氏は「中流以上の生活をしていた」⁽¹⁸⁾とし、荒正人氏は、オウエンが「貧しい家庭で育った」⁽²⁰⁾とされ、更にある辞典では、彼は「行商人の子」⁽²¹⁾にもなっている。

つまりオウエンの生家は、上流家庭ではないが、相当有力者であったから、中流へ、そして裕福ではなく貧しい家庭へという、奇妙なくいちがいをを見せているわけであるが、オウエン家がウエイルズの旧家であったとは、わが国では誰一人として述べていない。

そもそもオウエンは、サン・シモンとシャルル・フーリエとともにマルクスとエンゲルスによつて、三大空想的社会主義者と呼ばれて以来、空想的社会主義者といえはこの三人が代表者として理解されるようになっており、オウエンと他の二人との基本的相違をあげる場合には殊更に、彼が、貧しい家庭に育った点を強調するのが通例になっているようである。

事実、サン・シモンはフランスの貴族（伯爵）の長子として生まれ、祖父はシャルルマン大帝だともいわれていわれている。またフーリエは、フランスの富裕な商人の子であり、父の死後その遺産を八万マルクも相続している。これに対して、オウエンは北ウエイルズの田舎の馬具商兼金物商の子として生れたという事実を強調することは、彼の偉大さを説明する上で好都合となるからであらうか。

ロバート・オウエンの家系及び宗教的（メソジスト的）性格について

此の点で、わが国のオウエン研究者に重大な影響を与えてきたのはやはりマックス・ベエヤアだといえる。彼は『オウエン伝』の序文において、「ロバート・オウエンは社会主義の一般史に於ける独特の人物である。プラトー及びサン・シモンに似ずして、彼は身分の卑しい両親から生れた。Robert Owen is a unique figure in the general history of Socialism. Unlike Plato and Saint Simon, he was of humble parentage.」⁽²²⁾と述べている。

だが、オウエンの『自叙伝』で注目すべきは、その冒頭で、彼の父が「ウイリアム家と縁組した。同家は私の子供の頃には、ニュータウン近郊きつての豪農にかぞえられていた大家であった」⁽²³⁾と述べている点である。つまり母の実家が the most respectable farmers として聞えており、しかも母はその長女であったという点である。もしもベエヤアのいう如く、オウエン家が一介の humble な家柄であったなら、当時のウエイルズで豪農の長女との結婚が簡単に許されたであらうか？しかもオウエンは幼年時代、母方の方々の親類を訪れるのを習慣としており、「ウイリアム家がその階級での優れた家庭である The Williams, as I have said, were naturally a superior family of their class」⁽²⁴⁾とを重ねて強調しているからである。『自叙伝』において彼は頻繁に、当時の王侯貴族や著名人と交渉があったことを誇らしげに語っている。しかるに彼は、「父の両親については、二人とも私の生れる前に亡くなっていたので、別に詳しく父に尋ねようと思ひもしなかった」と、深く氣にとめていないそぶりを見せているが、「父方の家について思ひ出せるのは、私の父が年上の家人との話のな

かで、自分は年収五百ポンド相当の地所を裁判でなくしたということ(25)をきいただけである」⁽²⁵⁾ともことわっている。自分の方の弁護士が相手に買収されて失ったというこの資産は、決して小さなものではない。

息子(26)のロバート・デイル・オウエンは、この五百ポンドの年収は、一八七四年当時、五千ドルの収入に相当すると述べているくらいであるし、十歳のオウエンがスタムフォードのマクガフオグ氏の店(Mr. McGuffog's establishment)に勤めるに際して、「奉公期間は三年——一年目は無給、二年目は八ポンド、三年目は十ポンド、その家に寝泊りして食事洗濯は先方もち⁽²⁷⁾」という条件を承諾したことを考えると、ウェルシュプールで年収五百ポンドの土地を持っていたオウエンの父方は、むしろ素封家であつたと考えるべきではなからうか？、そうだとすればウイリアム家との結婚問題も簡単に説明がつくし、さらに、オウエン家が、ウェイルズでは伝統的に名門であつたという説明もつけやすいのである。

長子のロバート・デイル・オウエンは当時の父が、「いままさに自分が社会を改革し、世界を改善しつつあるのだといった妄想を抱いていたために、生来の無頓着さが手伝つて、それを無意味なこととして、折角の(ダン博士の)友情にあふれた申し出をとりあげなかった：もしも博士が彼に私の知らないような我が家の系図を送つていてくれたら⁽²⁸⁾」と残念がつている。ところが始めにみておいたように、オウエンは、ダン博士の情報提供の申し出に対して、公けの用事を理由に、私事として無視しており、礼状を出さなかったことを後悔しているだけである。

さて、オウエンが、先祖のことについて、本当に知らなかったのかどうかを確認するすべは、いまのところ無い。だが私は、以上の関連と、彼の長大な著作の随所からうかがうことのできる上流階級への異常な接近欲、さらに当時のイギリスの国情などからみて、すくなくとも、オウエンは、父方の家系について或る程度の知識は持っていたが、それをできる限り表沙汰にしない方針をとっていたと推測する。

周知のようにイギリスは地理的に小国でありながら現在も大体イングランド、ウェイルズ、スコットランド、アイルランドの四つの地理的単位から成立しており、比較的小きな土地で、一国民が融合していない所は、ヨーロッパでも他に例が少い。このことがイギリスの社会を複雑にしており、政治史の上でも問題を常に孕んでいる。とりわけウェイルズは、ケルト人Celtsの国であつた⁽²⁹⁾、アングルの国Angles Landであるイングランドの不断の抗争に明け暮れてきた。そしてさきに見ておいたように、一八四四年、プリンス・オブ・ウェールズ(Prince of Wales)の設置後においてもなお叛乱を起したオウエン・格蘭ダウアがかりにロバート・オウエンの先祖であり、さらに遠くロドリゴにまでさかのぼることができるとすれば、オウエンはケルト・イベリア人の後裔ということになって了う。そしてこの種の英雄の血を受け継ぐのが自分であることを明らかにすることは、保守的なブリテン、とくにイングランドやスコットランドでの自らの活動を極端に制約するということを、オウエン自身が承知していたのではないかと私には思える。

この点で更に注目しておいて良いのは彼は『新社会観』第二論文に

において、自分を「イングランド出身」と述べ、ウェイルズ出身とは言っていないことである。⁽²⁹⁾

従って今の私は、オウエン家の家系について、ダン博士の情報提供の申し出があった壮年時代以前から、オウエンは或る程度承知していたに違いないと考えており、彼の『環境説』が、それを軽視したとばかりは、一概にいえないのではないかとこの立場をとるものである。

最近のオウエン研究は、徐々にこの家系の謎の解明に近づきつつあるように思える。たとえば、イギリスのバット(John Butt)は、オウエンが下層階級の出身ではないことを強調してゐる⁽³⁰⁾、アメリカのハリソン(J.F.C. Harrison)は、オウエンが博愛家の風貌を備えていたとする骨相学者の説明を、彼のオウエン研究書の冒頭にかかげている⁽³¹⁾。オウエンの家系についての研究が深められるにつれて、彼自身の性格、思想形成の研究に、より新しい視野が開けることを期待したい。

- (1) Robert Owen : The Life of Robert Owen, written by him self. 1857. 初版 Vol. I, p.1 (以下単に Life と略称する)。
五島茂訳『オウエン自叙伝』(岩波文庫)一九六一年、一三三ページ(以下五島訳と略称)
- (2) オウエンの自叙伝執筆の時期に関する諸説については、前記、五島訳『オウエン自叙伝』の解説、四二五～四四四ページに付く。
- (3) Life, p.1 五島訳、一三三ページ。
- (4) Life, p.5 五島訳、二〇～二二ページ。
- (5) Lloyd Jones, Life, Times and Labours of Robert Owen. 1889
—90.

ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について

- (6) Frank Podmore : Robert Owen [A Biography] 1906, p.10.
- (7) Margaret Cole : Robert Owen at New Lanark, 1953, p.4.
- (8) Robert Dale Owen : Threading My Way, 1874, p.p. 44～45.
- (9) 今井登志喜『英国社会史(増訂版)』(上巻)一九五三年、一四二ページ。
- (10) David Williams によればウェイルズ公を自称した Owen Glendower の名前は Owain Glyndwr と発音する云々。 Encyclopedia Americana, 1965, Vol. 28, p.284 参照。
- (11) Life, Introduction, p.xviii.
- (12) 柏井園『基督教史』四五三～四五四ページ
- (13) シモン・オウエン父子について Encyclopedia Americana, 1965, Vol. 21, p.p.63～64 参照。
- (14) 北野大吉『ロバート・オウエン 彼の生涯・思想並びに事業』一九二七年、一五ページ。
- (15) 上田貞次郎『産業革命史』一九三〇年、二六二～二六三ページ。
- (16) 大林宗嗣『社会救済に関するオウエンの思想』『社会事業』(第一二巻第八号)一九二八年一月、五四ページ。
- (17) 森戸辰男『オウエン・モリス』一九三八年、八ページ。
- (18) 住谷悦治『ユートピア社会主義』一九四六年、八八ページ。
- (19) 宮瀬睦夫『ロバート・オウエン』一九六二年、二六ページ。
- (20) 荒正人『思想の流れ』一九六八年、一三七ページ。
- (21) 大塚金之助編『岩波小辞典・社会思想(第二版)』一九六五年、二一ページ。
- (22) 大林宗嗣、前掲論文、五四ページ。
- (23) Life, p.1. 五島訳、一三三ページ。
- (24) Life, p.6. 五島訳、二二ページ。
- (25) Life, p.1. 五島訳、一三三ページ。
- (26) Robert Dale Owen, op. cit., p.43.
- (27) Life, p.12. 五島訳、二二ページ。

- (28) Robert Dale Owen, op. cit., p.45.
- (29) Robert Owen, A New View of Society or Essays on the Formation of the Human Character, 1816, [Reprinted 1972 by A.M. Kelley] P.48.
- 揚井克巳訳『新社会観』(岩波文庫)一九五四年、五一ページ。
- (30) John Butt, Robert Owen As a Businessman, Robert Owen, Prince of Cotton Spinners, ed. by John Butt, 1971, p.168.
- (31) J.F.C. Harrison, Robert Owen and the Owenites in Britain and America, The Quest for the New Moral World, 1969, p.11.

三 オウエンにおけるメソジスト的

性格の形成 (1)

オルポート (G. W. Allport) は人格成熟の判断基準として、(1)自我の拡大、(2)自己客観化の可能、(3)人生に関する統一的哲学をもつことの三点をあげたが、とりわけその宗教的情操が、(1)充分に分化し、(2)力動的性格をもち、(3)道徳的一貫性があり、(4)包含的な人生哲学をもち、(5)統合的で (たとえば科学や技術を価値や目的に結びつける)、(6)基本的⁽¹⁾に開発性がある場合、宗教的人格が成熟していると説いている。

この判断基準にてらす限り、オウエンの宗教的人格は決して成熟していたとはいえないであろう。だが、たとえばジェイムス (W. James) が一種の宗教的成熟の極致を示すものとしてあげた「聖者性」(Saintliness) とか、信念—感情—行為の相関関係の調和が宗教的人格の成熟を意味するとしたストラUNK (O. Strunk) の説明を重視するなら

ば、オウエンの後半生の宗教的人格は成熟していたといえるであろう。

果してオウエンの宗教人格は成熟していたのか、それとも未成熟のままに終ったのか、どちらであるか適確な判断は下せる筈がない。

本来、複雑な内面過程をもつ宗教的人格の理解は難かしい。とりわけオウエンの場合、強烈な思想的個性と広汎多岐にわたる行動について再評価すべき部分が多く残されており、彼独自の『性格形成論』の枠内では理解できない、「謎」の部分の吟味がいまだに進んでいない現状では、その宗教的人格の成熟度について断定的評価を与えることは妥当とはいえないであろう。

いづれにせよオウエンは、幼少より極めて宗教的性格の強い人間であつたことについては、彼自身強調するところであるし、彼をとりまいた人々も一樣にそれを認めている。一般に人格研究の方法として、日記、書簡、自叙伝、手記などの研究を通じてその人格に迫る主体的方法をとることが多いので、以下、主として彼の最晩年の著作である『自叙伝』を中心に、とりわけ児童期に重点を置いて、宗教的経験の経過を追ってみることにしよう。

「このころ、八歳と九歳の間のことであつたらう。三人の婦人が私の家と親しくなつた。その人ちはメソジスト (Methodist) であつた。彼女たちは私が大変お気に入り、自分たちの書物を読め読めとたくさんくれた。私が宗教的な性向 (religiously inclined) であつたので、その人たちはしきりに、私を彼らの特殊な信仰に改宗させようとした。」⁽²⁾

メソジストは、十八世紀後半において英国国教会の貴族主義や信仰の弛緩に反省と抵抗をもったウエズリー兄弟 (John Wesley, 1703~1791 Charles Wesley 1708~1788) 達によって創められたプロテスタントの一派である。「実際、メソジスト派の場合は最初から大衆への伝道を目指していたのである」⁽³⁾から、オウエンの少年時代に、ようやく「英国の知識階級の間にメソジストが浸透しはじめていた」⁽⁴⁾という説明では充分ではなく、聖書を尊敬し、鋭い宗教的欲求を持ちながら、しかも国教会の教区的関心の外におかれていた新興の工業地帯・鉱山の住民に広く受け容れられていったことを重視すべきであるし、当時のイングランドが「貴族政治と自由、法治政治と無改革、個人の独創と制度の腐敗、上流階級の広教主義と下層階級のウエズリー教主義、人道博愛主義的な感情と努力の増大などの諸々の要素から成る時代であった」⁽⁴⁾とすれば、オウエンの育った当時のウェールズの福音主義宗教においてはメソジストがより重要な役割を占めたことは充分納得できる筈である。

したがってオウエンの生家の近くにメソジストがいたとしても不思議でないし、メソジストの婦人が、教区の会計や仕事に精通しているオウエンの父とその家族に積極的に働きかけてきたのは当然の成り行きといえよう。さきにみたように『自叙伝』本文では、「三人の令嬢が私の家と親しくなった」と述べているだけだが、『自叙伝』解説では「私の両親は国教会に属していたが、しばしば二人のメソジストの訪問を受けていた。彼女達は私を改宗させようとして大変な努力をくりかえし、メソジストの宗教書や読ませたい本をくれた」⁽⁵⁾と述べる

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

ておりオウエンの両親が、迷惑がっていた様子がうかがえる。また兄弟の中で、オウエンだけが、宗教的性格が強い子であったことについて、『自叙伝』に説明がないが、今なお最も忠実なオウエン伝の著者とされているポドモア (Frank Podmore) は、次の証言を掲げている。

「ロバート・オウエンの児童期の宗教的性格に関する証言はいくつか存在する。その一つは甥のロバート・オウエン・デエイビス (Robert Owen Davies) が「一八二六年十二月 (St. James Chronicle) に書いたもので、彼の伯父が無神論者でないことを弁護して「ロバート・オウエンは (小さい頃も) 独りで寝ていた。なぜなら、彼がベッドの脇でひざまづいて祈禱するといつても兄から殴られていたからである……。」⁽⁶⁾」

異常なほど宗教への関心が高く、知識欲の旺盛なこの児童を、メソジストの婦人が気に入るのは当然である。彼女たちは夥しい宗教書を与えたというし、七歳で町の小学校の助教師 Fisher となった彼には、町の知識階級の書斎から蔵書を借り出す自由が与えられていた。したがって、「どの本の言葉もみな本当と思ひこみ、深い興味をもって、大抵毎日一冊づつ読み上げていた」⁽⁸⁾七歳から九歳にかけての耽読生活の中から、オウエン独自の宗教的性格の基礎が形成されていったとみるべきである。

一般に人格の未分化な児童期においては宗教的にも未成熟な時期であり、両親や他の成人の宗教や、平易な宗教書の主張を無批判的に受け容れやすい。したがって、オウエンが「どの本の言葉も本当と思ひこんだ」ことは当然視されるが、その時期に「あらゆる宗派の宗教的著

作を読んで驚き出した⁽⁸⁾ことはもっと注目されて良い。彼は述べる。

「第一にキリスト教徒各派間の対立に、ついで、ユダヤ教徒、キリスト教徒、回教徒、ヒンズー教徒、儒教徒等々の間の、ないしはこれらと彼らのいわゆる（未開の）異教徒 Pagans と異端者 Infidels. との間の、執念深い憎しみに。これら相争う諸信仰または彼らのお互いへの執念深い憎しみについての研究は、私の心の内に、これら宗派のどの一つの派の真実性に対してもの疑いを創り始めた⁽⁸⁾。」

宗教書の繙読を通じてキリスト教世界内部での宗派的対立及び、世界の成立宗教相互間の不和確執に疑問を持ち始めた彼は、十歳にして、一切の既成宗教が「何か根本的に間違つたあるものがあるに相違ないと強く感じるようになる。」⁽⁹⁾

宗教的人格の成熟度が生活年齢に必ずしも比例しないにしても、十歳にして全世界の既成宗教についての知識をもち、そのありかたに疑問を抱くことは確かに非凡である。もちろんこの段階では、個々の宗教の定義する神の概念についての識別が進んでいたわけではない。だが、この頃までにミルトン (John Milton, 1608~1674) の『失楽園』やバンヤン (John Bunyan, 1628~1688) の『天路歷程』などを読み、メソジストの書物を読み、「三篇の説教文を書いて小牧師とよばれ、しかも自分の書いた説教文が、後に読んだスターン (Laurence Sterne, 1713~1768) の作品に余りにも酷似していたので見境もなく燃やしてしまったと述懐している『自叙伝』の記述に誇張がないとすれば、このウェイルズの少年の異常な宗教的早熟をその後の本人の「環境の影響の科学」のみで説明するにはいささが無理があるように

おもえる。

メソジストの婦人達の期待と願望に反して、オウエンは改宗することはなかった。だがこの婦人達の与えた影響は軽視すべきでない。なぜならその後のオウエンの生活史の上でメソジスト的信条の濃厚な反映として理解できる部分が豊かに遺されているからである。

既成宗教に疑問をもった十歳のオウエンは、その年（一七八一年五月）より、スタムフォード Stamford のマクガフオッグ氏の呉服店で三年の年季奉公に入るが、この間に、キリスト教はもちろん他の一切の宗教は、「各個人が自分自身の性質を形成し、自身の思想・意志・行動を決定する。それ故にこれらのもたらす罪惡について、神と同胞に対して責任を有する」⁽¹⁰⁾という誤まった想像にたっていることに気づき、「自然が諸々の性質を与え、社会がそれらを導く」ことを確信して、既成宗教の信念の一切を放棄してすべての人類の福祉のために従来の宗教的感情を普遍的慈愛の精神 (the spirit of universal charity) におき代えたと述べている。

ところで『自叙伝』には、この既成宗教の信念の放棄と矛盾するが、十二、三歳の頃（一七八三—四年）にキリスト教の安息日 (the Christian Sabbath) の遵守に関して、時の宰相ピット (William Pitt, 1736~1806) に書翰を送ったことを記している。イギリス的安息日の伝統の保持に努めた、『福音』運動の影響によって、一七八一年には聖日遵奉法 (Lords' Day Observance Act) が制定され、日曜日に有料の娯楽興行や演説会を開くことが禁止されたにもかかわらず、それが守られていない実状を述べ、その対策を要望したのが書翰の内容で

あると考えられるが、安息日の本来の意味については、『新社会観』の第三論文でもふれており、オウエンがその伝統の保持を強調した点についてはメソジズムの影響が考えられる。

マクガフオッグ氏はスコットランド出身であり、「スコットランド教会 (Church of Scotland) に属し、夫人は国教会に属していた。しかも夫妻は一緒に、朝は一方の礼拝にゆき、午後はもう一つの方の礼拝にゆくことにしていた。」そしてオウエンは常に夫妻に連れられて教会に出かけていたこと、相反目する両派の説教を聞いたことが、真の宗教を探究する上での一つの契機になったと述べている。だが、このマクガフオッグ氏を評価して、彼は「ひびくメソジスト的 Very methodical である」⁽¹³⁾といている。当時「安息日」の伝統の保持に最も貢献したのは初期メソジストであった。従って「安息日」を忠実に過したマクガフオッグ氏を指してこう述べたか、或いは、正直で、善良で、親切でリベラルな良識の持主であることを指して「メソジスト的」としたか、不明であるが、何れにもせよ、オウエンの生活態度からみて、彼こそメソジスト的であったといえる。

キリスト者ではなかったが、メソジスト的生活信条を貫いたオウエンが、同時代の人道主義的政治家であったウィルバーフォース⁽¹⁴⁾ (William Wilberforce, 1759~1833) を敬愛し続けたのは当然といえる。二一歳にして下院議員となり「イギリス帝国内の全奴隷の解放」に献身した彼に対するトレヴェリアン (G.M. Trevelyan) の評価は次のとおりである。

「彼は、フランス革命後それが政界、社交界で暫くの間極端に不人

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

気であった時でさえ、その人道主義的な目的を追求することにひるまなかった。彼は、この運動を支持するような人なら、いかなる政党、階級、宗教の人と共に働くことを常に喜んだ。彼は賢明な熱狂者であった。彼はその優しい性質の産物である社交的な魅力という彼の有力な資質を常に留めていた煽動家であった。彼は現今の二大政党社会における中立政治家の效用の古典的な模範である。彼が若し官途を欲したなら、彼が為した事を為し得なかったであろう。彼が若し人類より政党を選んだならば、彼の才能と地位を以てすれば、恐らく総理大臣としてピットの後継者になっていたであろう。彼が名声と権力の一つの種類を犠牲にしたことが、もう一つの、そしてより高貴な、人々の憶い出に残る資格を彼に与えたのである」⁽¹⁵⁾

十八世紀末から十九世紀にかけてこの国の政治的社会的分裂は宗教的な宿命と考えられていた。

この時代に政治の中枢にあつて社会目的の追求と達成のために、あらゆる政党、階級、宗派の協調を歓迎した彼の政治力に期待したオウエンは『新社会観』の第一の論文の献辞をささげており、『自叙伝』においては、終生、自分の味方にもった友人の氏名の筆頭に彼の名をあげている。

もちろん政治家であるウィルバーフォースはメソジストではなかった。だが、一七八四年、福音主義 (evangelicalism) を受け入れ、いわゆるクラッハム派 (Clapham Sect) ^{クラッハムとはロンドンの南西の一区で、ウィルバーフォースはここに住んでいた} の指導者として奴隷廃止運動を続けた彼にはウエズリーの影響は頗る大きいし、彼の著書『此の国の上中等社会に行はれたる宗教の

組織を真正のキリスト教と対照したる實際的觀察A. Practical View of the Prevailing Religious System of Professed Christians (1797)』は、「首尾一貫した實際的『宗教』 a consistent practical religion」を構想していたオウエンにとっては貴重なテキストであつたものと思われる。

さて私は、いままでオウエンの宗教的人格を考える場合、或いはその生活信条ないしはその思想的基盤を考える上で、幼時に受容したメソジストの性格が濃厚であることを証明しようとしてかなりの紙数を費してきた。だがふりかえってみると、末だにその論拠が曖昧模糊としているのは、肝心のメソジズムの信条、とくにウエズリーの主張の基本にふれていないからであると考ええる。もちろんウエバー (Max Weber) の述べる如く、「教理について少しばかりの考察をおこなうことは、神学になじまぬ読者には厄介であり、神学上の教養ある人々には急ぎすぎて表面的と思われるにちがいないが、止むをえない。」⁽¹⁶⁾

メソジズムの日本伝来後すでに一世紀が経過しているといわれながら、わが国ではその一般的理解が進んでいるわけではないし、今日では、「かつて貧しい人々の宗教的酵素であつたメソジズムは、今や上中流階級の教会となつてしまった」⁽¹⁷⁾という非難は、わが国でも否定できないようであり、したがつてオウエンをメソジズム的とする主張が、この国では簡単に受け入れられるとは考えられないので、以下、ウエズリーの主張を中心に簡単に紹介しておくことにしよう。

「メソジスト」を名のる団体がイギリスに生れたのは一七二九年であり、メソジスト勃興の予言者はロオ (William Law, 1686~1761) ぶ

あるといわれる。⁽¹⁸⁾ だが実質的には、この派の信仰復興運動は、「キリスト教とは独自の生活態度を意味する」⁽¹⁹⁾と力強く主張したロオの薫陶を受けたジョン・ウエズリーである。国教会牧師の子であつた彼は弟チャールズやオックスフォード大学同窓の友人数人と共に、「大学の規則で定められた学問の方式を遵守する」ことを目的とした小団体を組織した。「メソジスト Methodists」の名称はこれに由来するといふのが柏井泉氏の説明であるが、トレヴェリアンによれば、メソジズムと呼ばれる生き方はかなり古くからあり、慈善貴婦人ヘースチングス (Lady Elizabeth Hastings, 1682~1739) が、「巨額の富を慈善に捧げ、就中、貧しい学生を学校に通わせ大学教育を受けさせるために、適切に考案された計画を実行するのに使つたのである」⁽²⁰⁾といひ、きびしい中にも情のこもつた日常生活をおくることにつとめたメソジズムがウイルバーフォースを以て終る十八世紀の博愛事業を大いに鼓舞したのだといっている。

だがキリスト教世界の外に住むわれわれにとって、これらの説明は何れも不充分であつて、この点に関する限りモロア (André Maurois) の次の記述がより解説的であるから、やや長文に失するが引用しておく。

「必要のあるところ間もなく可能性が生ずる。中産階級や下層階級の中には一層熱烈な宗教を必要としている人々が多数存在していたが、しかもそれらの要求を充す点で国教派も非国教派も共に完全な無能力を暴露したが故に、何者かが現われてそうした宗教を民衆に与えねばならない情勢に立ち至つていた。その何者かがジョン

・ウエズリーだったのである。オックスフォードに在学した青年時代の彼は、信仰を合理的同意なりと認める広教派教徒であつた。しかし、この学説は、彼を完全には満足させるまでに至らなかった。

「理性は推理することを万一にも止めることがあるかもしれぬ」と彼は考へに「とすれば、終に真理や永遠の福祉を発見したといったところで、それがどうして確實であり得よう？ 人は聖寵を感じ得ないであらうか？」一七二六年頃のオックスフォードの大学街は数人の青年たちが一の神聖クラブ Holy club を創立して、その会員たちが断食したり、祈ったり、貧乏人を見舞ったり、野天で説教したり、互にその罪を告白し合つたりしているのを見て、驚きの目を見張つた。世間の人はウエズリーやその友人たちをひどく馬鹿にして「メソジスト」というとこの綽名をつけた。―彼等は聖書研究の会を設け方法的に信仰生活の鍛練に努めたので方式拘泥家という意味でメソジストという綽名をつけられたのであつた。―その後、この綽名は、現に数百万の信徒を数えている一教会の名称となつた。⁽²¹⁾

イギリス国教会の牧師の子として生まれながら、国教会の貴族主義に不満をもち、窮乏にあえぐ大衆の心の糧の欠乏を眼前にし、抽象的純理論的神学では人の心に与える感化力とならないことに気づいた彼は、聖寵 (Grace) を得るために、理性の作用の外に眞の信仰の姿を見ようとする。自己の魂を救いたい欲求をもつならば人の言葉を聞くのではなく、神の声に従ふことによって、救われたいという真剣な努力を重ねるべきであると主張する。十八世紀末の人本主義神学に反対した彼は聖書のキリスト教への復讐を説く。

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

地球上のキリスト教国に果して聖書のキリスト教が存在しているといえるか？ 住民全体が聖靈に満たされその信仰と実践が一致しているキリスト教国は未だ地上には存在していないのでないか？、といった問いかけは、聖書に対して尊敬の念を抱きながら国教会の教区の関心の外におかれていた下層階級に広く受け容れられていったのは当然である。

当初から知識階級を主たる対象とする意図をもたなかったメソジストは、信仰と実践の両面において初代教会的でなければならぬとしその「方法」も単純平易であつた。ウエズリーの説いた実践規定は次の三点である。

- ① コリント人への第一の手紙第十三章を良く読むこと
- ② 森羅万象の中に神を見出し、神の為すすべてをつくすこと。
- ③ 手段をつくし、方法をつくし、あらゆる場所で、あらゆる人々に、いのちのある限り、あらゆる善をつくすこと。

もちろんメソジストもドイツの敬虔派 (Pietist) に類似して、「キリスト者の完全」を説いているが、新約聖書の大意に従つて、キリスト者は罪を犯さない程度において完全である。だからといって全く罪がないという意味ではなく、愛 (キリスト者の上にそがれる神の愛) において完全となるのであり、従つて、コリント人への第一の手紙第十三章を熟読することによって愛を感じ得し、ひたすら神と人につくすが、キリスト者の使命であると説くのである。

コリント人への第一の手紙第十三章は次の十三節より成っている。
① たといわたしが、人々の言葉や御使 (みつかい) たちの言葉を語つ

ても、もし愛がなければ、わたしはやかましい鐘や騒がしい鏡鉢
(によろはち)と同じである。

② たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があつても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。

③ たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。

④ 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

⑤ 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

⑥ 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

⑦ そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

⑧ 愛はいつまでも絶えることがない。しかし預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

⑨ なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。

⑩ 全きものが来る時には部分的なものはすたれる。

⑪ わたしたちが幼な子であつた時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなつた今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。

⑫ わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかし、その時には、顔と顔を合わせて見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしは完全に知られているように、完全に知るであろう。

⑬ このように、いつまでも存続するものは信仰と希望と愛と、この三つである。

(22)

このうちで最も大いなるものは、愛である。
メソジストの婦人の積極的な勸奨を受けて少年オウエンは、聖書のこの部分をくりかえしくりかえし読んだこととされるし、ここに盛られた普遍的な愛に関するパウロの聖なる見解を生涯支持し続けたことは明らかである。たとえば、『世界革命切迫についての人類への手紙』(Letters to the Human Race on the Coming Universal Revolution, 1850) は、彼の七九歳の作品であるが、聖書のこの一章だけが、どうして真理を伝えているのか不可思議だといっている。

「キリスト教の聖書のなかに押込まれた一章が、その導く原理及び實際上の結果に於て、過去及び現在のあらゆる神学及び宗教の原理と実際とに正反對であり、人心の形成及び今日の人類の行為に正反對であるという事実である。……それは英訳されて、文字から来る印象は變っているが、そこには、古代及び近代のいわゆる一切の聖書の文字よりは、より一層の真理がふくまれ、それらの文字よりは誤りのすくないものである。……この章を書いたものが誰であろうと、そんなことは問題ではない。誰が、何時話そうと語ろうと真理は真であり、虚偽は偽りである。」(23)

この『手紙』において彼は、「この章」の各節ごとに自己流の解説を付しているが、たとえば、さきにあげておいた第一節は、「この章」の真髄であるとして、

「人間のうちの最も学識ある人の最高な立派な言葉も、この純な無制限な愛がなくては、不必要以上であるということである。どんなに立派に語られたに言葉でも、この精神に欠けておれば聴衆にとっては鐘(gong)や鐃鉢(symbal)と同様であって、ただその耳をたのしませ、理性を混乱させるに過ぎない。真理は雄弁宏弁を必要としない。ただ真理をしてハッキリと了解させるに足るだけの、僅かな言葉で平明に語ることを必要とする。」⁽²⁴⁾

もちろん、オウエンも「いつまでも存続するものは信仰と希望と愛」であることを認める。だが、彼は、「信仰と愛とが精神の両極であって、互に相反撥する」結果⁽²⁵⁾もたらされる矛盾に敏感であった。彼もまた、「最も大いなるものは愛である」というパウロの真理は認めている。だが彼にとって理性の洗礼を拒否する信仰と純粹な愛との共存は絶対に認められるものでなかったし、既成宗教(キリスト教)の説く愛の限定性と不合理性を生命をかけて批判し続けたのであった。

彼は人間にとって神が不必要であるとは一言も述べていない。したがって信仰を否定もしていない。そればかりか彼が生涯をかけて求め続けたものは、愛の本質にてらして矛盾しない神であり、信仰であった。それを自然宗教と呼ぼうと、合理宗教と呼ぼうと生活の実際と結びつかない宗教は彼にとって無価値なものであった。彼が求め続けた

のは、人間の人間に対する愛(人間愛・人類愛)と矛盾することなく、人間の希望、直接的には日常生活における福祉と幸福の実現をもたらすエネルギーにあふれた宗教なのであった。⁽²⁶⁾

周知のように彼のおびただしい著作には宗教に関する記述量が異常に豊富である。そして非キリスト教世界の主要宗教についてふれていることも事実であり、世界の既成宗教についての知識を深めている点を自賛しているふしもみられる。だが、オウエンのユダヤ教、回教、ヒンズー教、儒教、佛教その他についての知識は極めて浅薄であり、宗教の本質としての愛、愛の本質としての神の吟味にあたっても原則的にはキリスト教の教義の枠内に限定されている。しかし幼くして世界には多種の宗教が分立していることを知り、世界の「約十二億の人口のなかで、十二人のうち一人がプロテスタントである。十二人のうち一人が正しくて十一人が間違っていると思うか?」⁽²⁷⁾などと息子に語っているごとく、キリスト教世界だけが人類世界ではなく、そのごく一部でしかないことを承知していた彼は人類全体の立場から、その福祉に矛盾しない宗教と、神を考え続けたのであった。

「人間のうちのあらゆる本質的・永続的の進歩・改良に対する障害は、地上諸国民の『宗教』である。」この障害を克服して、道理と常識にかなった、実際的一宗教を樹立しない限り人間の解放はあり得ないと確信し、独自の合理的宗教を構想し、あらゆる既成秩序の圧迫に耐えながら、ひたすらその普及に専念したオウエンの後半の生涯の言動の分析にあたっては、彼の長い人生を貫いた幼時からのメソジストの要素をぬきにしては考えられないであらう。

- (1) Cf. G.W. Allport, *The Individual and his Religion*, 1950, 原谷達夫訳『個人と宗教』一九五三年、参照。
- (2) *Life*, p.3, 五島訳 一七ページ。
- (3) マックス・ウェーバー、梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫・下巻) 一八一ページ。
- (4) G.M. Trevelyan, *English Social History, A Survey of Six Centuries, Chaucer to Queen Victoria*, (a Pelican Book) 1967, p.354.
- 林健太郎訳『英国社会史』一九五〇年、五四四ページ。
- (5) *Life*, Introduction, p.xviii.
- (6) Frank Podmore, Robert Owen, *A Biography*, 1906, p.8, 脚註①。
- (7) 彼の自叙伝本文では三人、その解説では二人となつてゐる。(Life, Introduction, p.xviii および本文 p.3 を比較のこと)。
- (8) *Life*, p.3 五島訳一六ページ。
- (9) *Life*, p.4 五島訳一七～一八ページ。
- (10) *Life*, p.16 五島訳三九ページ。
- (11) *Life*, p.16 五島訳四〇ページ。
- (12) *Life*, p.15 五島訳三八ページ。
- (13) *Life*, p.12 五島訳三二ページ。
- (14) *Life*, p.211 五島訳三六八ページ。
- (15) G.M. Trevelyan, op. cit., p.p.508～509, 林訳 七九二～七九三ページ。
- (16) マックス・ウェーバー、梶山・大塚訳、前掲書、一〇ページ。
- (17) W.W. Sweet, *American Churches*, 仁戸田六三郎監修『現代宗教のモメント』一九六九年、二九〇ページ。
- (18) 柏井園、前掲書、五〇三～五〇四ページ。
- (19) R.H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism* (a Pelican Book) 1938, p.194.

- 出口勇蔵、越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆(下巻)』(岩波文庫) 八五ページ。
- (20) G.M. Trevelyan, op. cit., p.377 林訳五八三ページ。
- (21) アンドレ・モロア、水野成夫・小林正訳『英国史(下)』一九五八年、六〇一～六〇二ページ。
- (22) 日本聖書協会『新約聖書・(小形英和対照)』一九七二年による。
- (23) ロバート・オウエン、青野季吉訳『人類に与ふ』一九二六年、一二三～一二四ページ。
- (24) 青野、前掲訳書、一二五ページ。
- (25) 青野訳、一二七ページ。
- (26) たとえば一八一七年夏のいわゆるオウエンの宗教否定演説を参照のこと。
- (27) Robert Dale Owen, op. cit., p.84.
- (28) *Life*, p.159 五島訳二八〇ページ。

四 オウエンにおけるメソジスト的性格

の形成 (2)

ロバート・オウエンの人生哲学に与えたメソジストの影響を考えるとき、彼の特異な行動的性格が、多分にジョン・ウェズリーのそれと共通する点があるのを見出すのは私ひとりではないように思える。

第一に、オウエンには民衆の生活の奥底に潜んでいた宗教心に光をあてたウェズリーの平和的平等主義的福音の影響を受けている。ウェズリーは、当初はメソジストが、独立の教会をうち立てるべきだとは考えなかったし、むしろ在来の各派の教会の内部における信仰復興運動を意図していたのであって、英国国教会の教会以外に教会を立てる

のは彼の初志ではなかった。したがってやむなく連合会 (The United Societies) のちのメソジスト教会が成立した際においても、

「どの種の意見も人に強制してはならぬ。懺悔の形式や教理の把握の相違をとやかく言うべきでない。国教徒、非国教徒を問わず、長老派であろうと独立派たるを問わない。独立派であれ再洗礼派であれ、礼拝形式はそれぞれのままで良いし、クエーカーの場合も同様であり、とや角言うべきではない。… (会員としては) 一つの条件、ただ一つの条件だけが要求されるのである。…すなわち自己の魂を救いたいという真の欲求、という条件である。それで充分である。それ以上の要求をしなくても良いし、それ以外に何の強調もしなくてもいいのである。」⁽¹⁾

と述べている。自らを神によって救われたいとする真剣な努力があるならば、一切の繁雑な形式を問わないのがウェズリーの強調点であった。

かようにキリスト者に無差別の福音を説くことは現代においては極く当然のこととされるが、「階級間の相違と、下層階級の当然の隷属の必要が強調され、…社会上の差別が適切に設けられていた」⁽²⁾十八世紀の英国においては画期的なことであった。一般に十八世紀は、理性が自主的活動の段階に入り、それを抛り所にした市民階級が、社会の新しい支配者になろうとした時代であるといわれる。⁽³⁾しかし、当時の英国の宗教に焦点をあててみる限り、理性は僅かに国教会広教派 (Broad Church) の寛容の精神の中に同居するだけで、理性を代表する筈の知識人の多くは、宗教について語ることを避けていたとみられる。

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

るのである。

「近代の非宗教的な国家と古い宗教的世界の典型的な英国的妥協が、今尚この国の法律である。」⁽⁴⁾とするトレヴェリアンの指摘は正しい。

たとえば現在もなお国王の正式称号が Elizabeth the Second, by the Grace of God, Queen of the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland of Her other Realms and Territories, Heads of Commonwealth, Defender of the Faith である如く、また主として世襲貴族によって構成されている上院

House of Lords に二六名の宗教貴族 (英国国教会大僧正二名、僧正四名) が議席を有する如く、政治と国教会との癒着の絆は断たれていない。また今日、いまなお宗教の自由と平等の原則をめぐって紛争が絶えない北アイルランドの市民権運動が、歴史的にはローマ法王庁から独立した英国国教会と、依然してローマ法王に忠誠を誓うカトリック教徒との四世紀に及ぶキリスト者同志の内紛に他ならないとすれば、教義の理解や、礼拝の形式の如何を問わず、ひたすら魂の結束を求めたウェズリーの伝道が、いかに当時の民衆にとって福音であったか、そして肝心のオウエンの宗教観ないしは性格形成に甚大な影響を与えたかを推察することができよう。

もちろんメソディズムの成立の社会的意義をみるにはこれだけでは不十分であり、当時における国教会の優越性の確立が及ぼした非国教徒、とりわけ民衆の政治的、社会的差別状況を確認しておかなければならない。

英国国教会の樹立は一五三〇年代にさかのぼるが (一五三四年、ヘン

リー八世の首長令 Act of Supremacy) 反カトリック、反ピューリタンの立場が貫かれ、厳しい国教遵奉を要求する「クラレンドン法典 (constitutions of Clarendon, 1164) 主義が実質的に活かされたのは、ピューリタン革命の緊張の後の宗教的弛緩の時代、つまり十七世紀の後半からであった。

まず国教会に服従しない限り公務員にさせない「就任宣誓法 Test Act」は一六七三年に公布されている。オウエンは『新社会観・第四論文』で人間の知性を混乱させないために、そして国教会と国家の双方を安定させるために、この「就任宣誓」誰もが良心的に加わるわけにはいかない信仰告白」の撤廃を求めているが、この法律が廃止されたのは一八二八年であった。

一七五三年の大法官「ハードウィック卿の婚姻法」(Lord Hardwicke's Marriage Act of 1753) は、国教会の牧師による結婚以外はいかなるものも合法としない規定であり、非国教徒、とりわけローマン・カトリックにとつては耐えがたい侮辱になっていた。これは一八三六年になって、カソリック或いは非国教の礼拝所における宗教的儀式を許可し、官庁に結婚の届出をすれば合法とする法律の施行によって修正された。

十八世紀のこの国の参政権は、貴族と国教会の牧師の占有物であったし、非国教徒にも公平な教会税、それでいて不公平な埋葬の自由とか、オックスフォード・ケンブリッジ両大学への入学制限などは、十九世紀の前半においても基本的な解決をみなかつたのである。

宗派的差別が生んだ社会的、政治的差別の除去に当って、現実の生

活上の障害の打破よりも、その障害をもたらした宗教的閉鎖性を人間の理性というよりも、大衆の内在的情念に働きかけて問題の解決を企図したのが、メソジストであり、その指導者ウエズリーであったが、宗教の実践性を、情念によって回復し、内在する人間論的主観と理性を結合させることによって宗教と生活実践との直結を計ろうとしたオウエンの「方法」は、事実、理性の世紀に生きた知的エリート達の改革への志向とは多分に趣きを異にしている。此の点に、私共はオウエンの思想形成に与えたメソジズムの影響をみる事ができるし、更に、彼が、キリストを唯一の神としなかつたにしてもなおかつオウエンの生涯の軌跡にウエズリーの性格的特徴や行動特性と類似する諸点を見出すことができるのである。

ウエズリーは一七〇三年六月に生れ、一七九一年三月に死亡している。その長き一生は殆んど十八世紀を掩っている。これに對して、オウエンは彼におくれること約七〇年、一七七一年五月に生まれ、一八五八年十一月にその一生を閉じている。産業革命の全期間を掩っているオウエンの八七年余の生存期間と、ウエズリーの寿命とは奇妙なことに殆んど同じである。ウエズリーは晩婚(四八歳)であり、オウエンは二十八歳で結婚しているが、共に夫婦の結婚生活は幸福であつたとはいえない。

以上の類似点は偶然のもたらした結果であるとしても、長命を保つたウエズリーが健康法としてあげた、①神が招いた業に徹すること、②一年に四五千哩旅行すること、③定刻に起床すること、④常に説教することなどはオウエンも熟知していたものと思われる。

ウエズリーは一七三五年、アメリカに渡り植民地の貧民伝道に尽くしたが、三八年にはモラビアン Moravians の共同社会を訪れ、その原始キリスト教的信仰生活の実態にふれて深い感銘を受けている。また彼自身も認める如く、その方法の基礎にはクエーカーの影響も考えることができる。

これに対し、オウエンにはシェーカー (Shakers) の影響があることを無視できない。一八一七年に彼は『一致と協同の村 Village of Unity and Mutual Co-operation』の名のもとに独自のコミュニティ計画を発表しているが、その同じ年に『シェーカーと呼ばれる人々の宗教社会の概要 A Brief Sketch of the Religious Society of People called Shakers』と題したパンフレットを発行している⁽⁷⁾。最晩年の彼の雑誌『千年王国ガゼット Robert Owen's Millennial Gazette』(創刊一八五六年三月二日、終刊五八年七月一日)の第二号(一八五六年四月一日号)、第三号(五六年五月一日号)にも、シェーカーの指導者で、シェーカー主義を社会主義の一類型と考えたエヴァン (F.W. Evans) との交信文を掲載している。また『自叙伝』では、その活動を次のように高く評価している。

「私有財産を持たない大衆に基礎をおくシェーカーの共同社会 (Communities) は千年王国の生存状態 (millennial state of existence) をもたらすために実際における進歩の第二段階を示してきた。

第一段階とは、すべての人に秀れた肉体的・精神的性格を形成することであり、第二段階はすべての人のために、豊かな富を創造することであった。そして第三段階はこの二つを結合させることであろう。」⁽⁷⁾

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

ウエズリーの回心にはモラビアン (Moravian) の啓発が大きかったのと同様に、オウエンにおけるシェーカーの影響は無視することはできない。たとえばトム・フソンは (E.P. Thompson) は、W.H.G. Armytage の *Heavens Below* (1961) を引用して⁽⁸⁾

「一七七四年、マザー・アン Mother Ann と少数の一派がアメリカに最初のシェーカー共同社会を創設した。四〇年の後、ロバートオウエンはシェーカーの成功に感銘し、そのアイデアを世俗的形式で大衆化したのである」⁽⁹⁾と述べているほどである。

オウエンが、シェーカーの共同社会に関心を持つようになるのは、彼自身が、当時のクエーカー (Quakers) の主だった人々と知り合うようになったからであり、彼の『新社会観』の公刊後であることは確かである。だが、⁽¹⁰⁾「世界全体が私の教区にある」(All the World my Parish—The Journal, 1739) と考えていたウエズリーの、千年王国論者の思考の影響を考慮することができるし、更に、ウエズリー、アン・リーに与えた初期クエーカーの千年王国論的能動主義のオウエンにおける投影を考へることもできる。

ウエズリーは四万回以上の説教を行なった外、出版事業に力を尽くし、著作や解説の出版二〇〇種に及ぶが、とりわけ大衆向けの廉価出版の先駆者で、一部一ペニーの代価で出版した宗教パンフレットは五〇種に及ぶといわれている。⁽¹⁰⁾オウエンが読んだ夥しい宗教書の多くは、この廉価本を指すと考えられるが、オウエンの多作、とりわけ後半生の夥しい廉価本の出版にはウエズリーの影響が考えられる。そしてこれらの出版物の主張がますます「他愛のない繰り返し」であり、大衆

とは議論するのではなく、自己の主張を繰り返すだけで、慈愛をこめて、聴衆が彼の信するところを真実であると理解してくれる日を静かに待っていた⁽¹¹⁾」のが晩年のオウエンであったとすれば、そこにこそわれわれは千年王国論者としての彼の面目躍如たる姿を見出すとはいえないか。⁽¹²⁾

もともとオウエンの千年王国論思想は、アナバプティスト (Anabaptists) のそれではない。アナバプティストの精神は、おおむね初代のキリスト者の信仰、生活、行為にならうことを目的にしていたが、オウエンが求めた宗教の真髄は、基本的には聖書と無縁であった。彼における愛と慈愛の宗教は自然の法に合致する環境の教育を阻害することなく、新しい社会制度の創造を推進するものでなければならなかった。現実に社会福祉を侵害している宗派性の強い信仰を捨て、宗教的強制のない、社会福祉の実践と直結する宗教を、人間の合理性の確認の基底となる神と愛の所在を求め続けたのであった。

私はいままで、オウエンの性格ならびに思想形成を考えるため、彼の特異な宗教的性格とりわけ彼の生涯を貫いたメソジストの性格の影響について、あれこれ考えてきた。

私のこのメソジストの性格強調の主張に対して、従来のオウエン研究者の中から、「そこまでメソジズムの影響を重視するなら、なぜにオウエンをとり巻いたクエーカーの影響を顧慮しなかったか」という批判が生れることが当然予想される。そこで以下簡単に彼とクエーカーとの関係を考えておきたい。

『自叙伝』によると、オウエンは、マンチェスター時代（正しくは彼

がドリンクウォーター氏の工場支配人をしていた一七九二〜九四年）に交友を結んだ「マンチェスター文学哲学会」(Manchester Literary and Philosophical Society)と「マンチェスター学寮」(Manchester College)のメンバーの名前をあげ、これらの知的エリート達と自然科学から宗教、道徳その他万端にわたって討論し、彼らから「推理機械」(the reasoning machine)という仇名を受けたと語っているが、当時の親友の一人、哲学者ドウルトン (John Dalton) はクエーカーである。⁽¹³⁾

一八一二年、オウエンはクエーカーの教育者ランカスター (Joseph Lancaster) をグラスゴーに招いて、貧民教育推進のための公開大宴会を開いているが、その際、「彼の属している友会 (the Society of friends) の妙な習慣、宗教的先入感に通じている自分」が宴会の座長となるという条件でランカスターが出席を引き受けたと述べている。⁽¹⁴⁾
一八一四年二月、ニュー・ラナーク工場が競売に付され、オウエンは苦心の末買収に成功するが、彼を除く新合資者六名のうち三名までがクエーカーであった。⁽¹⁵⁾

かように、オウエンは、その社会的活躍期に、クエーカーの代表的人物と交渉をもっている。しかし彼の『自叙伝』ではメソジストを非難した箇所が見られないのに対しクエーカーの宗教的偏見と、ランカスター方式による教育の不完全さを非難する表現が頻繁にあらわれるし、『新社会観』にもその徴候を示す表現が見られる。したがって、私は、オウエンはクエーカーの厳格な個人主義と道徳教育には、むしろ反感をもっていたと断じているし、しかも彼のクエーカー批判には、「父がクエーカー教徒であったので、わたしは非常に立派な道徳教育

とかなり豊富な有益な知識とをさづかることができたのは、わたしにとって幸運であつた⁽¹⁶⁾と述べながらも、その激しいヒューマニズムの故に、理神論の立場から人間性を確信し、「わたしは地位にも人物にも左右されることなく、事物があるがままに見る。わたしの祖国は全世界であり、わたしの宗教は善を行なうことなのだ⁽¹⁷⁾」と主張したペイン⁽¹⁸⁾ (Thomas Paine, 1737~1809) の著書の影響があると考えている。

さらに私は、オウエンが一種のユニテリアン (Unitarian) と考えられていた点にも一顧を与えておかなくてはならない⁽¹⁹⁾。

『自叙伝』によれば、マンチェスター時代、彼が出入りしたマンチェスター学寮は、ユニテリアンの牧師養成校であつたし、自分に好意をもってくれた文筆家の一人としてユニテリアンの女王的存在と考えていたフレッチャー夫人 (Mrs. Fletcher) の名をあげている。

ユニテリアンは、宗教を人間存在に内在する問題解決の一方法と考えていること、キリスト教の神を教会の中に閉じこめないで、大自然の青空の中に移そうとしたことや、良心は、「自然の声」であり、それが「神の声」であり、良心に神的作用 (the divine faculty) を認めるなど、プリーストリー (Joseph Priestly, 1773~1804) らの神学的唯物論 (唯物主義と有神論の結合) は、現代のユニテリアン普辺救済主義者協会 (Unitarian Universalist Association. 一九六一年創立) の實際活動にみられるごとく、ヒューマニズムと自然科学の結合を目して、世界の既成宗教の教義の統合をはかるなど、キリスト教から離れた、いわゆるアドバンシング・ユニテリアニズムへの発展を当初から予測させるものがあるが⁽²⁰⁾、かりに、オウエンが『新社会観』執筆の前後にお

ロバート・オウエンの家系及び宗教的 (メソジスト的) 性格について

いて、たとえばジェームズ・ミル (James Mill, 1773~1836) の指導を受けて、彼らの信条の宇宙理論的發展を予想していたとするならば、彼をユニテリアンの一人と考えてみることも不可能ではない。

もちろんオウエンに初期社会主義の典型をみようとしたコールは、彼の性格と思想形成に与えたメソジズムやユニテリアニズムの影響を重視しない。だがその彼にしても、オウエンの一般的宗教的性格には注目して、こう述べている。

「あらゆる教派の教義を否定し、無神論者、唯物論者と評判されていた彼ではあるが、オウエンは生涯を通じて極めて宗教的な人間であつた。このことは彼の生活の全体像を理解する上で、深く考慮しておかなくてはならないことである。」⁽²¹⁾

しからば、オウエンの宗教的人格の成熟化に最も寄与した宗教信条こそ、メソジズムではなかったか、この点に関して私はトムプソンのウェズリー評を重視する。

「ウェズリーは最上級の精力的で熟達した組織者であり、統御者であり立法家であつた。彼は民主主義と風紀の組合せ、教義と宗教感情との効果的な結合に成功した。」とトムソンは述べ、商業地域において、鉱山で、紡績工場で、労働者の居住地域で、誰でも自発的に参加できる説教会をひんばんに開きキリスト教各派の教会の階級性、閉鎖性を非難したことが、一七九〇年代の社会不安のイングラントを暴力革命から防ぎ、間接的ではあつたが、働らく階級の組織化と、階級的自覚心の発展に役立ったのだと説明している⁽²²⁾。

ここで改めて第一節に引用しておいたベェヤアの画く「オウエン像」

をふりかえるとき、彼の予言者の性格において、指導者性格においてウエズリーのそれを彷彿とさせるものがあることは誰しも否定できないであろう。

(終)

- (1) R. Southey, *Life of Wesley and the Rise of Methodism* (1890edn.), p.545.
- (2) G.M. Trevelyan, op. cit., p.379. 林訳五八七ページ。
- (3) たゞは荒正人『思想の流れ』九九ページ参照。
- (4) G.M. Trevelyan, op. cit., p.528. 林訳八二二ページ。
- (5) Robert Owen, *New View of Society*, p.137. 揚井訳 一一〇ページ。
- (6) *Millennial Gazette*の刊行状況は次のとおりで、第一一、一五、一六号を除き一部六ペンスであった。不満と不安から解放される現世天国の到来を信じ、最後の情熱をたぎらせたオウエンのカリスマ的預言者の性格の究明のためにはこの雑誌の主張を注意ぶかく吟味する必要がある。創刊号(一八五六年三月二二日)、第二号(四月一日)、第三号(五月一日)、第四号(五月一日)、第五号(六月一日)、第六号(七月一日)、第七号(八月一日)、第八号(一〇月一日)、第九号及び付録(一〇月一日)、第十号及び付録(一八五七年一月一日)、第十一号(世界進歩人會議議事録、八月一日、五シリング)、第十二号(一〇月一日)、第十三号(十一月一日)、第十四号(一九五八年二月一〇日)、第十五号(七月一日、八ペンス)、第十六号(七月一日、一シリング六ペンス)。
- (7) *Life*, p.243. 五島訳 四二二ページ。
- (8) ショーカー(Shakers)の創設者、アン・リー(Ann Lee)は一七三六年、マンチェスターの鍛冶屋の娘に生まれ、若くして鍛冶屋の妻となつた。一七五八年、クエーカーの一員である Jane Wardlaw によつて回心し、キリストが女装して再臨すると説き諭されたが、彼女は自らを「世界のアン」(Ann the World)と称したが、信者達は「マザー・アン」(Mother Ann)と呼び続けた。アメリカに最初のシェーカー・コミュニティが生れたのは一七八七年とするのが正しいと思える。なお、シェーカーの全盛期は一八三〇〜四〇年で、六千人のメンバーが一八の部落に分住したというが、今日でも少数の信者が、ニュー・イングランドの辺地に残存しているという。Rosabeth

- (9) Moss Kanter, *Commitment and Community*, 1972, p.60~62. E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963, p.51.
- (10) 柏井園、前掲書、五〇九ページ。
- (11) G.D.H. Cole, op. cit., p.312~312.
- (12) マンハイム(Karl Mannheim, 1893~1947)はこう述べてゐる。
「千年王国論者が期待してゐるものは現在と結びつくことである。…この場合大切なことは辛抱して待つことであり、好機に至るのを今か今かと待機していることであり、したがって彼にとつてはこれ以外の時間も距離化されているわけではない。…彼にとつて重要なことは、千年王国がこの世にあり、…この世において行なわれる別の種類の存在への激変として現世的なものをから発生するということである。」
Ideologie und Utopie, 1929. 鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』一九六八年、二二五〜二二六ページ。
- (13) *Life*, p.33~34. 五島訳七三〜七四ページ。
- (14) *Life*, p.106~107. 五島訳一九六〜一九七ページ。
- (15) J. Walker, J.Foster, W. Allen(三名がクエーカーであった。残り三名はJ.Fox(国教会分離派) M. Gibbs(国教会保守派)及び J. Bentham(無宗教)であった。
- (16) M. Conway, *The Life of Thomas Paine*, 1909, p.5.
- (17) Thomas Paine, *Right of Man*, 1791/2, (in Pelican Books), 1969 p.250. 西川正身訳『人間の権利』(岩波文庫)一九七一年、三一五ページ。
- (18) 息子ロバート・デイル・オウエンは「トム・ペインの本を読む者は、不信心者だ」と母が述べたことからは父は不信心者といえるから自伝で述べてゐる。Robert Dale Owen, op. cit., p.p. 78~79.
- (19) 晩年のオウエン教の社会伝道者(Social Missionaries)の有力な一人であつたLloyd Jonesは「オウエンをエミチオン・マナーと考へることが出来た述べてゐる」(Lloyd Jones, *The Life, Times, And Labours of Robert Owen*, 1890, p.179).
- (20) また、コールは外面的にはエミチオン・マナーのオウエンに与えた影響は認められないと述べてゐる。(G.D.H. Cole, op. cit., p.39.)
- (21) Joseph Priestley, *Appeal to the Serious and Candid Professors of Christianity*, 1770. 参照。
- (22) G.D.H. Cole, op. cit., p.39.
- (23) E.P. Thompson, op. cit., p.p.40~50.